

# そ 染め

## 現代工芸に生きる日本の美

ふる た よしたか  
古田 好孝

わたなべせんこうじょう  
戦前に渡邊染工場に弟子入りした父が戦後独立し、北区内に工場を築く。高校卒業後に家業である型染めを継ぎ、現在は手描きなどを交えて型染めの枠を超えたさまざまな作品を手がけている。



## 染めとは

布に染料を用いて色をつけていくことをいいます。染める際には、糸の繊維を伝って染料が広がってしまうのを防ぐため、布に糊やロウ、糸などで狙った箇所<sup>のり</sup>に染料が染み込まないようにします。染めには、型染めや手描き染め、ロウケツ染め、絞り染めなどのさまざまな技法があります。



## 染めの魅力

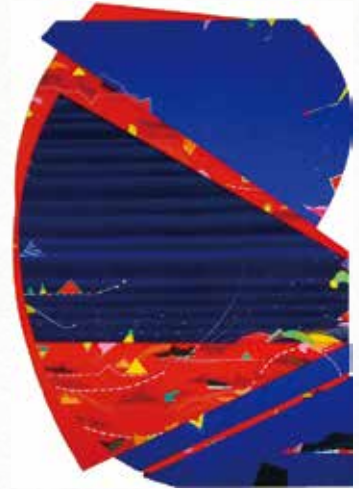
絵画とは異なり、布に色を入れていくため、布が本来持っている布地の色と染料との掛け合いに味わいがあります。色遣い<sup>つか</sup>を変えたり、ぼかしやにじみをあえて出したりすることで、職人はさまざまな模様を表現します。

## 現代工芸に生かされる染めの技術

染めというと、一般的には着物などがイメージされますが、古田さんは染めの技術を生かし、現代工芸の分野でも活躍しています。

右の写真は、「愛知の工芸2020」という作品展に古田さんが出展した作品です。

布を張るパネル作りまで自ら手がけ、さまざまな染めの技法を生かして作られています。



そら ひびき  
「宙の響」

## パネル作品の制作工程

- ① 構図やデザインなどを決め原寸大の下図を作成する。
- ② 布を木枠に張り込み、水で色が落ちる  
あおばな  
青花を使って下絵を描く。
- ③ 隣り合う色かにじまないよう、糊のりを使って  
模様の輪郭をなぞる「糸目糊置きいとめ のりお」をする。
- ④ 布全体の染料のにじみを防ぐ「地入れじい」という  
作業の後、布に刷毛はけを使って色をつける  
「引き染め」をする。



染料が乾燥してムラができるのを  
防ぐために手早く染める!

- ⑤ 水洗いや裏打ちなどの仕上げをして完成。

# 職人さんに聞きました！

**Q** さまざまな染めの表現に挑戦するようになったきっかけはありますか？

**A** 高校卒業後に家業の型染めを継いだのですが、私が20代前半の頃、ご縁があって徳川美術館の宿直のアルバイトをしたことがありました。そこで多くの人や歴史的な美術作品に触れたことが大きな刺激になりました。

その後、日本画家のもとで日本画を基礎から学び、型染めの枠を超えた作品を手がけるようになりました。

そういったことがなければ、ここまで幅広い染めの表現をすることはなかったのではないかと思います。



**Q** 作品を作るうえで大切にされていることはありますか？

**A** デザインを大切にしています。膨大な数のスケッチをベースにして、作品のイメージを形にしていきます。デザインが決まれば、仕事の7~8割くらいは終わっているといえるのではないのでしょうか。

そして、デザインから型彫り、染めまでの作業を自ら一貫して行うことで、デザインしたとおりのものを形にできることが、自分の仕事の醍醐味だいごみだと感じています。

デザインから染めまで幅広くこなしてきたからこそ、ここまでやってこられたという古田さん。一目見ただけで、自分の作品だとわかってもらえるような仕事をしたいと語っています。



# さまざまな染めの技法

## ロウケツ染め

ロウを鍋に溶かして筆に含ませ、固まらないうちに布に置いていきます。ロウの部分が染料をはじくことで、さまざまな模様が表現されます。



▲ 手前に置いてあるのがロウを溶かした鍋



▲ ロウを置いた部分が白い模様で表現される

## 手描友禅

ケーキのデコレーションのように、絞り袋に入れた糊のりをノズルの細い筒先から絞り出し、自由に模様を描いていきます。

糊のりが堤防の役割を果たすため色がにじまず、模様の内側から彩色をして最後に背景を染めていきます。

絵画的に自由な構図を表現することができます。

